

角野卓造

関輝雄

亀田佳明

塩田朋子

山本郁子

栗田桃子

太田志津香

鬼頭典子

上田桃子



昭和四年十一月二十八日

東京の世田谷町若林町に

一人の女の子が生まれました。

その子の名前は、くくにこ

やがて、その女の子は

物語の母になるのです

この物語は、一人の女の子が

物語の母になるまでを描くものです。

彼女が見つめていたものが

彼女に染み込み、いつの間にか

彼女自身となり、言葉や物語として

あふれ出していく……。

おかしくてやがて哀しい

物語の母の物語。

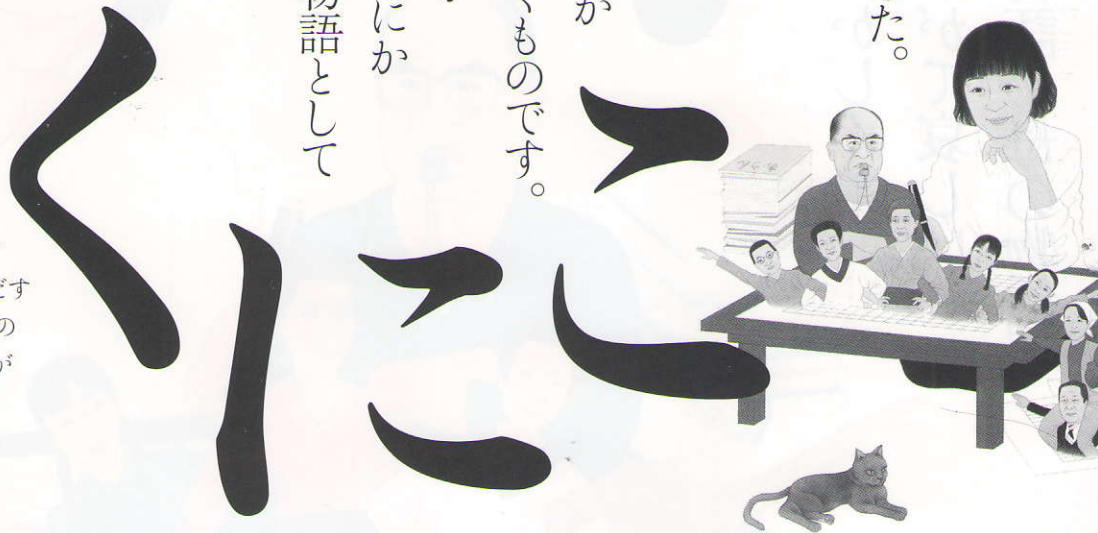
鑑賞団体の皆様へ

十年に亘って全国の団塊世代に笑いと元気をお届けした「おじさんシリーズ」(『缶詰』『踏台』『ゆれる車の音』)に続いて、全国のがんばる女性に明るい笑いと元気、そしてちょっとセンチなドラマが詰め込まれた「女優シリーズ」が新たにスタートします!今回は、現在でも多くのファンに支持される向田邦子さんの青春時代をモチーフに、彼女が作家になるまでの軌跡を辿り、おかしくも哀しい人間のあれこれを描き出す作品になります。

運営担当サークルの皆様はじめ会員の皆様と共に、元気がみなぎる、心に残る例会を作ってゆきたいと思ひます。どうぞご期待下さい!!

劇評から

向田の著作などを引きながら中島淳彦が書いたのは、邦子がもの書きとして歩きだすまでの物語。それは、戦争を挟んだ昭和の「家族」の話でもある。豊富なエピソードが次々と繰り出され、鶴山仁演出は笑いをちりばめながら、舞台を軽快に運ぶ。感じのいい、楽しい作品に仕上がった。(朝日新聞 山口宏子)



向田邦子(一九一九-一九八二)

映画雑誌編集のかたわらラジオ、テレビの台本を書き始め、「寺内貫太郎一家」(TBS)、「阿修羅のごとく」「あうん」(以上NHK)など、絶妙なセリフ、巧みな構成で、向田ドラマと呼ばれる記憶に残る数々の傑作を生み出した。エッセイ「父の詫び状」で作家としてもデビューし、「花の名前」「かわうそ」「大小屋」では第83回直木賞を受賞。鋭い人間観察にもとづく描写の巧みさが今なお高い評価を得ている。写真提供：文藝春秋



文学座公演

作 中島淳彦

演出 鶴山仁

装置 石井強司

照明 金英秀

音楽 川崎絵都夫

音響効果 望月勲

衣裳 原まさみ

舞台監督 三上博

演出補 所奏

制作 矢部修治

協力 Bunko/まよや
宣伝美術 文京図案室
イラスト ホセ・フランキー

<http://www.bungakuza.com>

【日時】 2月6日(木) 18:30

【会場】 呉市文化ホール

入会のお申し込みは

入会金(1,000円) + 2ヶ月分会費を添えて呉市民劇場事務局まで

■会費(月額) 一般 2,400円 学生 1,300円 高校生以下 1,000円

呉市民劇場事務局(呉市本通2-5-1グローバル本通103号) Tel.0823-22-4516

後援/呉市教育委員会